

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成20年9月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻9月号(通巻590号)

風土



白
絣
神
蔵
器

十字路に人の消えたる炎暑かな
一生の中の夕べや水を打つ
胞衣塚は小林一茶田水沸く
風鈴に風のうらごゑおもてこゑ
形代に八十二歳は数へにて

米こぼる 四万六千日の宵
胸に咲く 初伏の花や 勝彦忌
生きてゐて カサブランカの今朝ひらく
戒名に 政の一字や 百日紅
入滅の掌より おほむらさきの翔つ
電柱は 翼をもたず 夏旺ん
あと五年 生きるつもり 白緋



竹間集

同人作品



新茶 島谷征良

つばくらめ飛びかふ空はありたれど
青嵐天狗の団扇飾らるる
浦島草糸の疲れをみせにけり
鯉跳ねて卯月の川となりにけり
卯の花や三日月おぼるともならず
高きよりにせあかしあの落花かな
淹れてすぐ光はねぬる新茶かな

夏蝶 大竹淑子

神子みしこの名を里に祭の幟立つ
とうしみや湖の舟屋の軒ほつれ
飛魚干すや岬の鼻なる神の村
野筋ののすぢなる矢竹女竹や皮を脱ぐ
遣り水やに音なき流れ半夏はんげ生草
赤松の肌亀甲かめこうに夏点前なつぜん
夏蝶なつてふのひらりと眼鏡外ははずしけり

半夏 齊藤小夜

大和路の仏恋ふるも半夏かな
夏布団なつふだんさらりとかけて夜鷹よたか聞く
夜の音ひとり聞き入る半夏かな
浜屋はまや顔かほ白秋歌碑へいまし
紫陽花あじふぎや水屋みづやを区切る麻のれん
麻座布あしざふ団だん少し薄目うすめがまたよろし
用心用心の傘かさは手提げてひげに桜桃おうとう忌

雲の峰

徳丸峻二

飛石に置かれ半夏の二三束
雷去つて文机に散る原稿紙
夏布団畳みて旅の終りけり
抱きし児の手を伸ばす先昼顔咲く
木洩れ日の斑ふに身を染めて氷菓売
船下りる客の終りの金魚売
雲の峰入れて鉄骨組まれけり

雀の子

宮川みね子

雀の子青邨朗人の句碑にかな
赤門の正面医学部雲の峰
矢をはなつ七月東大弓道部
一葉へしるばなほたるぶくろかな
水甕のほどよき深さ夏来る
短夜の水をはなるる羽音あり
眼底をのぞかれてゐる暑さかな

きのふけふ

浜 福恵

きのふけふ丹波は栗の花時雨
釣つり舟ふね草につゆ一粒の重みかな
またたびの花や旅路の観世音
八百荒神石に宿りて蛇の衣
青鳩の声をま上に宝物庫
尼寺に客人のあり夏椿
青簾飄と人来る気配して

梅雨の月

鈴木とおる

六月や救急ベッドの上に覚め
風薫る総帆広げ日本丸
噴水の息する向うに美術館
白鷺の通ふ大堰魚止り
梅雨の月リハビリバスの殿りに
二日ほど鳴きて郭公移りけり
リハビリの口中体操走り梅雨

酷 暑

— 塩田 博久 —

鳩の足赤し朝涼の石畳
コンビニの店番眠き大暑かな
駅裏に放置自転車蔦茂る
不快指数てふ語のありき溽暑かな
何事ぞ炎暑の犬に胴着着せ
冷房に犬の剪定トリミング
歩道橋におのが足音日の盛り
鬼灯市駅に始まる人の波
春銭が頭に四万六千日
熱帯夜かそけき音に耳聡く

麦の秋

有元 文子

朴の花ガス灯のごと山照らす
魚籠腰に竿で空打つ山女釣り
忠敬の一行越えし夏峠
名城にかしづく播磨麦の秋
麦秋や揖保さうめんの里豊か
播州は赤とんぼの歌似合ふ里
旅終へて涼しき家の鍵開ける
音読の百人一首麦の秋

山河集

同人作品



神蔵
器選

峰雲や一人に一本づつの水
まつ白な地軸となりて那智の滝
梅雨深き膝の欲しがる広辞苑
文字の海にただようてをり梅雨の底
七夕や母より継ぎし住所録

浅田 光代

南風吹く大阪駅の砂時計

橋添やよひ

昼灯す納骨堂や青嵐

水美しき若狭やひとつばたご咲く

源氏物語展

千年を呼び起したる麻暖簾

京丹後海の際まで植田して

朝市に苗の出揃ひ五月来ぬ

十井 三乙

篠の子を入れて大きな袋かな

露の葉を叩きて雨の通り過ぐ
雨に濡れ重き牡丹を抱き起す
いつかある自適の日々や茄子の花

噴水のむかうに北欧行きの船
みなづきの銀座に托鉢尼僧かな

内藤 静

見沼

一の関二の関跡や草いきれ
岡象^{みづ}姫^は命^めの小さき社や雲の峰
薄日はや泰山木の花捉ふ

抱へくる西瓜砲弾かもしれぬ
目標を定め少女の立ち泳ぎ
背泳ぎに浮かばせてゐる胸二つ
金魚玉負けず嫌ひな大眼

北島 和装

風土独語／神蔵器



江ノ島を傾けてゐる金魚玉

北島 和装

日蓮上人の竜ノ口法難のとき、日蓮をゆるす使者と、刑場から来る使者とが、ここで行き合つたというので行合橋という。作者は七里が浜海岸駐車場にでも車を置いて、この行合橋から七里が浜を鎌倉高校前、小動、腰越橋の方へと一人で吟行していたのではなからうか。この辺からは、どこからも左手に海を隔てて、江ノ島が手に取るように眺められる。

掲出句の金魚玉は、旅館とか海水浴客目当ての海の家などというものではなく、鎌倉時代からの長い伝統を受け継いで、今も細々ながら店を出している腰越漁港あたりの漁師の家ではなからうか。

少し強引だが能と言えば、金魚玉はシテ金魚の精であり、ワキの江ノ島は作者の分身、歌ころの投影とも見られる。それにワキツレ、江ノ島神社の弁天さまを信仰する漁師ら数人が賑々しく登場する。

ひとしきりはなやかな舞台になるが、やがてワキが登場し、ワキはシテを舞台上に引き出し、演技をさせ、舞を舞わせれば一応身をひいて脇柱のかげの座に控える。それからがシテの一人舞台となる。

シテの舞は、あるときはとてつもなく長い時間、びたりと静

止して微動だにしない演能史上類をみないほど動きの少ないものになるであろう。おそろく誰も彼も飽き飽きするかも知れない。しかし、何百人の一人ぐらいは、独染が全く静止しているように見える時、最も早く回転していること、あらゆる動きを経過し、捨象し尽した果にある究極の表現であることに感動し、動かぬことの実在感に酔うことの出来る観客もいることであろう。

僧兵の駆け下りし径夏蓬

浅田 光代

信長の叡山焼き討であろう。元亀二年（一五七一年）九月、信長軍四万は叡山の門前町坂本に殺到し、叡山の東から西へかけ、ふもとを取り囲んだ。軍兵たちのかかげる松明の火が、夜光虫のように暗黒の湖岸を縁どつて、半円の火の輪となり、その火の輪がじりじりと山上へ向かつて縮まっていた。

その夜、叡山の社寺堂塔五百棟、男女僧俗、首を切られるもの三千六百余人。「立つている建物はみんな焼け、生きておる人間はみな殺せと叫ぶ信長の声にこたえた軍勢が、片つぱしから民家をも焼き、逃げまどつた住民をも刺し殺し、斬り殺し、鉄砲で撃ち殺し、死体は累々として山をなし、血は流れて川と化した」と（信長公記）に伝える。

この焼き打ちに対する二人の武將光秀と信長の性格の違いが知れるような話がある。

光秀は少しうすくなつた頭を床板にすりつけるようにし、叡

山焼き打ちの非を理路整然と言葉を尽くして、こればかりは思
いとどまるよう諫言した。ところが信長にはかえって火を注ぐ
ようなもので、「二度と左様なことを申すと、今夜かぎり君臣
の縁を切るぞ」と叱りつけられ、結局、信長の意に従って焼き
打ちを果した。

一方秀吉は黙って信長の命に従った。しかし焼き打ちには逃
げる者は追わず、はじめから相手の逃げ径は残しておいたとい
う。

山中越えも、雲母坂越えも、待ちかまえていた織田勢に皆打
ちとられ首をはねられた。掲出句の「僧兵の駈け下りし径」は
秀吉がそれとなく開けておいた逃げ径であったかも知れない。

風土集



神蔵 器選

江ノ島を傾けてゐる金魚玉 川崎

板前を焦がす藁火や土佐鱈

漁貝店の魚拓に並ぶアロハシャツ

妊婦編むレースは夢の形かな

青芝やケーナ奏者に風湧きぬ

晴天のヘルシーロード夏の蝶 川崎

六月の杭をはなさぬ捨て小舟

一遍の通りし道の植田かな

薫風や弥陀のおん手のくすり指

水底に砥石泡立つ雲の峰

近江坂本寺

里坊より水奔り出て濃紫陽花

僧兵の駆け下りし径夏蓬

山法師比叡の風に火の匂ひ

青梅雨や不断念仏の鉦の音

北島 和装

水井千鶴子

浅田 光代

蚊柱の揺らぎて明智が妻の墓
くちなしや端溪置かる奥書院 平塚

デジャビユーの街角上る梅雨の月

濡れ縁に良寛を待つ蝸牛

石仏の二体相寄る麦の秋

テーブルに妻の伝言白薔薇

露は葉をうち重ねつつ束ねけり 東京

六月やくまなく灯す地下の街

片脚の虹立つ新宿都庁前

抽んでてヒマラヤ杉に梅雨深し

総持寺

蟻走るものみな巨き総本山

夏に入る会津に下駄材筆筒材 横浜

メレンゲの白より白き大噴水

新しき眼鏡に火蛾をはらひけり

中沢 三省

柿沼 盟子

中村 洋子